

センリョウ

牧 幸 男

新しい年が明け、お正月を迎える。お正月には多くの人が行き来し忙しい気分になるが、暮れの忙しさとは比べものにならない。のんびりした気持ちになるひと時もある。その気持ちのまま、七草、そして小正月を過ぎてもその気分から抜けだせずにいると、気がついたら1月も終わりに近づいている。毎年繰り返す新しい年のスタートである。1月の庭には観賞する植物が少ないが、家の中にはお正月以来の鉢植えや切花の植物が、元気な姿で心を和ませてくれる。センリョウはそんな植物のひとつである。冬でも濃緑色の葉と珊瑚のような赤い実のコントラストが美しく、切花も長持ちするので、正月の花材として需要が多い。同じく冬に赤い果実をつけるサクランボ科のマンリョウ(万両)が存在するが、赤い実がマンリョウより目立つことから人気が高い。



センリョウの果実



マンリョウの果実

千両は、日本を含む東アジアから東南アジア、南アジアに分布するセンリョウ科の植物である。我が国では北海道をのぞき全土の常緑広葉樹林の林床に群生しているが、最近は栽培で目にする事が多い。この植物樹高は50~70cm程、植物全体が緑色でやや草質、茎は竹のようにふくれた節があり、葉は対生し、葉縁には鋭い鋸歯がある。夏、頂に短い複穂状の花序をつけ、花は白味を帯びた黄緑色の極めて単純であり、1個の雌しべと1個の雄しべだけからなる。秋に小さな球果を結び初冬に美しく紅熟、球果は年を越しても落ちない。繁殖は地下部の節から分枝して群生している。最近は、庭の樹下の植物として植える他、鉢植えや切花でも流通していることが多い。千両は、被子植物であるが、裸子植物に近い形態の植物として知られている。このため変種が少なく、果実は赤が主で、稀に黄色のキミノセンリョウ(黄実センリョウ *Sarcandra glabra* f. *flava*)、樺色ノウルミノセンリョウ(学名不明)が存在する程度である。

千両は、センリョウ科やコショウ科、ウマノスズクサ科等の植物群とまとめて「古草本」と呼ばれている。これは、センリョウ科やコショウ科の植物が他のどの被子植物の化石よりも古い時代の地層から相次いで発見され事が由来である。[古草本]^{*}の意味は被子植物が持つ最も原始的な花粉である単溝性花粉 *oncosulcate pollen* を持っている植物群のことで、花粉の分類による名称、発芽のための溝または孔が原則的に1個のもの、またその派生型も含んでいる。原始的な被子植物の一群と単子葉植物の多くに見られる植物類である。

注* : 1976年に米国のカリフォルニア大学のドイル教授とイェール大学のヒッケイ教授が最初に使い出した「Paleoherbs」と云う植物群の日本語訳。センリョウ科やコショウ科の化石が、他のどの被子植物の化石よりも古い時代の地層から相次いで発見されたことが要因である。

センリョウは江戸時代初期から栽培され、実生も行われていたようである。しかし、センリョウに千両の字が当てられたのは、江戸後期になってからである。更に、庭木、盆栽や生花として親しまれているこの植物も、歌題となるのは江戸時代ではわずか、明治も後半になってからである。理由はハッキリしないが、歳末や年始の花材に採用されたのが比較的新しい習慣と考えるのが妥当のようだ。

露霜の 下りてしけはひ 朝の冷え 千両の実は 紅に冴えつ 和田禮

一両が ほどの明るさ 実千両

足立幸信



千両の名の由来について、牧野富太郎博士は「実が美しく千両に値する意味と、サクランソウ科のマンリョウ (万両) *Ardisia crenata* に対しての千両の意である。高知県では千両と言うのは本種のことでなく万両のことである。」と述べている。このような読み違いは、諏訪市で本来のマルメルをカリンと呼んでいることと同じである。漢名は接骨木であるが、同名の植物もあり使われることは少なく、千両が多く使われている。別名は草珊瑚、竹節草、仙蓼などがある。各由来は、草珊瑚は結実の姿が珊瑚に似ている、竹節草は茎に竹のような節が生ずる、仙蓼は葉がタデを思わせ美しい姿による。

学名は *Chloranthus glabra* (*Sarcandra glabra*)、属名は *chloros* (黄緑) と *anthos* (花) の合成語、種小名は無毛、あるいは滑らかな意で、葉が滑らかで黄緑の花を咲かせる植物となる。南天の項でも紹介したが、果肉に発芽抑制物質を含んでいるので、千両の種子も皮を除いて蒔かないと発芽しない。小鳥の消化管を通った種子が発芽する。

良く千両、万両と一口に呼ばれ近縁植物と思われているが、学術的には全く異質で類縁には程遠い種類である。その違いについて千両はセンリョウ科、万両はヤブコウジ科と科が違うこと。大きな違いは、千両の花は花被がなく一つずつ雄しべと雌しべが露出している不完全花、万両は五裂下した萼と花弁が、それに5本雌しべを持つ完全花である。特に、実のつき方が千両は葉より高くむき出しに付き、万両は葉の中に隠れている。更に、葉は千両の縁辺は鋸歯状で色は明るい緑色、万両の縁辺は波状で色は濃緑色である。蛇足だが、千両、万両が存在すれば百両、十両が存在しても良いと思うのが常で、一般的には枳殼 (カラタチ) 花を百両、藪柑子を十両にあてることが多い。

植物名にお金と結び付くような呼び名が生まれたか、理由は不明であるが、冬に実が赤く熟するのでその価値を見立てたと言うのが通説である。池坊専応 (1482~1543) 口伝の『池坊専応口伝』(1542) には仙蓼葉の記述がある。今日の千両らしい記録が現れるは、尋舊子 (生没不明) 著『立華正道集』(1684) が最初である。『和漢三歳図絵』(1723) には「近頃出づる白子仙霊は、種子より変わるもの也」と記述、伊藤伊兵衛 (1676~1757) 著の『花壇地錦』(1695) には仙蓼の記述があるが、千両の字は見当たらない。仙蓼や仙霊の発音がセンリョウ、また、数多くの赤い実がなる万両に対し、実の数が少ないことから千両となった説もある。

薬用は、漢方で使われることはないが、生薬名を九節茶と呼び、葉・枝民間療法として使われてきた。効能は消炎、去風除湿、活血、止痛の効能があるとされ、根は鎮痛、解熱、生葉を打撲傷、関節炎に使われてきたが、我が国ではあまり使われなかったようであろう。

千両は、江戸初期から地下茎から毎年新しい茎が出て株が広がるので、庭木に栽培されたり切り花として利用されてきた。現在は縁起がよいと、新しい年の福を願って飾られることが多い。花言葉は、「可憐」「恵まれた才能」「富貴」「裕福」等である。

